

Title	江戸漢詩形式論—格調詩と性霊詩を中心に—
Author(s)	黄, 鶯
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96161
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (黄 鶯)	
論文題名	江戸漢詩形式論 一格調詩と性霊詩を中心に一
論文内容の要旨	
<p>本論文は、江戸時代の音韻規則及び失律に対する認識を解明し、江戸中期の古文辞派と江戸中後期の清新性霊派の代表詩人の詩作における平仄の実態と失律・拗体詩の特質を考察するものである。以下、各章の概要を記す。</p> <p>第一章「江戸時代の平仄律及び失律に関する認識」では、まず『日本詩話叢書』を中心に、江戸時代の近体詩の平仄律を明らかにした。江戸前期（十七世紀）の平仄律は一、三、五字目の平仄が自由とされる。すなわち、律詩の最低限の条件、いわゆる「二四不同、二六対」あるいは「一三五不論」が守られている。なお首句の押韻が自由とされる。首句以外の奇数句の句末の平仄が規定されている。江戸中期（十八世紀）以降の平仄律は前期の規則を含めた上、「孤平」と「下三連」を避ける方向に整備されている。首句の押韻について、原則として七言詩は押韻し、五言詩は押韻しない。前期と中期以降の平仄律の最大の相違は「孤平」と「下三連」を避けるかどうかというところにある。</p> <p>次に失律や拗体について当時の各詩学書における詩論を考察した。江戸前期の論は量的に少なく、中国の諸家の論を引用することに止まっている。中期に入ると、拗体に関する論争が盛んに行われたようになった。中期前半、古文辞学を尊重する松井河楽と林東溟を代表とする論は原則的には拗体禁止、とりわけ初学者が正しい韻律に従うべきだという主張をとる。江戸中期の半ば頃、平仄律の整備とともに、拗体の様式に対する認識も以前よりずいぶん明確になってきた。竹山や春台を代表とする論は、初学者が拗体を避けるべきだと主張するが、拗体に関して、ある程度許容する立場をとる。中期後半になると、古文辞派が退場し、北山と寛齋を代表とする性霊派の論は初学者が拗体を避けるべきだという主張はなくなり、作詩は韻律に縛られることなく、自分の実感実情を最優先すべきだと主張する。総合的にみると、時代が下るにつれて、平仄律が厳密に規定されるようになるとともに、拗体に対する寛容度がますます高くなっていったのである。平仄律の厳密化の過程は漢詩に対する認識の深化及び詩壇の成熟と見なしうる。なお拗体詩への寛容さの増加は韻律の混乱という結果をある程度招いたものの、作詩人口の増加・多様化を促進させたという積極的な面もある。その中で、性霊派の果たした歴史的な役割は看過できないであろう。</p> <p>第二章「『徂徠集』の律詩における荻生徂徠の韻律意識」では、『徂徠集』における五言律詩・七言律詩の平仄を精査し、徂徠の韻律意識を考察した。『徂徠集』において、「孤平」と「下三連」を避ける後代の厳密な平仄律に合致した律詩は、五律総百二十三首のうち、五十一首あり、七律総百三十八首のうち、九十九首ある。「孤平」については、五律には四十七箇所、七律には二箇所ある。「下三連」については、五律には三十九箇所、七律には二十四箇所ある。徂徠の時代には平仄律がまだ厳密に整備されていなかったとはいえ、作詩の難易度の高い七律の半数以上が後代の厳密な韻律に合致したこと、徂徠自身が下三連に言及したこと、彼が唐話に親しんでいたことから考えると、徂徠は後代の厳密な平仄律を知っており、技術的にもそれに従って作詩できると判断してよいであろう。しかし、詩集には律詩の最低限の条件である粘対律も守っていない詩がある程度存在していることから、徂徠が韻律に過度に拘るとはやや言いにくい。失律の詩に関して、平仄のバランスを保つために、一首全体の平声の字数と仄声の字数を同じように調整したり、対句に対応して下三連を対にして使ったり、聯内の平仄の均衡を保つために上句の平仄を下句においてひっくり返したりするという徂徠の精緻な調整が窺える。また、近体詩の定式とは全く別趣の韻律を積極的に試みようとして、吟詠する対象の個性に対応して仄韻詩を作り、詩意の転換を強化するために拗格を利用し、緊張感を表現しようとして特異な平仄配置で「観獵」詩を作ったりするように、近体詩の可能性をいろいろと模索する徂徠の作詩姿勢が看取できる。韻律と詩語との優先順位を考えると、徂徠は、律詩の韻律を厳守するより、詩語の選択、すなわち表現の微妙な「文」を優先すると考えられる。よって徂徠の格調説には典雅含蓄な「修辞」（詩語）や「高華雄渾」な詩風が含まれるが、近体詩の韻律は必ずしも含まれるとはいえない。とすれば、後代の古文辞派の形式主義批判は徂徠詩の韻律の面には適用できないと言えよう。</p> <p>第三章「『南郭先生文集』の律詩における服部南郭の韻律意識」では、『詩律兆』の平仄律に従い、『南郭先生文集』（以下『文集』という）初編から四編までの律詩の平仄を調査し、各編の失律の様式を明らかにして南郭の韻律意識を考察した。初編において五言律詩総七十四首のうち、失律の詩は四十六首ある。失律の種類を見ると、粘対位</p>	

置、つまり二、四字目の失律は三箇所、孤平は四十九箇所、下三平は七箇所、下三仄も七箇所となる。失律の様式が孤平に集中していることがわかる。七言律詩総八十八首のうち、失律の詩は三首ある。そのうち、粘対位置の失律と孤平はなく、下三平は三箇所、下三仄は一箇所ある。初編の段階、孤平と下三連が重大な失律であることはまだ一般的な認識になっていない。南郭も同様な認識を持っているという可能性は考えられる。初編と比べて、『文集』の二編以降、明らかに変化したのは孤平の減少である。初編の四十九箇所に対して、二編には一箇所のみ、三編には一箇所のみ、四編には全くなくなっている。また二編以降、新たに出現したのは拗格詩、常套拗換である。それは律詩の特別な存在形式として認識されるようになったと考えられる。三編以降、下三平と下三仄の数が逆転していることから、南郭は近体詩において下三平が下三仄より重大な失律であると意識するようになったと考えられる。律詩の最低条件である粘対律の失律が『文集』を通じて存在する。粘対位置の破格のところは、平仄の入れ替えによって平仄のバランスを保たせるように調整したりするような南郭独自の工夫が窺える。なお五律において、三編以降、粘対律の失律が増加していることから、作詩の手腕が円熟するとともに、平仄に縛られず、より自由自在に作詩するという南郭の姿勢も看取できよう。『文集』の初編から四編までの考察を通して、南郭の韻律に対する認識が深化することがわかる。第一章で論じたように、江戸中期に入ってから平仄律がだんだん厳密化され、十八世紀中葉、後代のより精密な平仄律がほぼ定着している。そういう漢詩界の韻律意識の深化はちょうど十八世紀前半の詩壇で大いに活躍した南郭という一詩人の身の上に反映されるといえよう。

第四章「市河寛齋の拗体詩——拗格詩の利用——」では、『詩律兆』の平仄律に準じて寛齋の古文辞時代の詩集『寛齋摘草』（天明六年〈一七八六〉序、同刊）及び詩風転換後の詩集『寛齋先生遺稿』（文政四年〈一八二一〉跋、同刊。以下『遺稿』）における律詩を精査し、両詩集における拗体詩を考察し、寛齋の詩論と結びつけて彼の韻律意識及び拗体詩の特徴を論じた。両詩集における拗体詩は拗格詩とそれ以外の拗体詩と二分できる。拗格詩以外の拗体詩についていえば、『遺稿』の一首のみ二字の破格になるが、他はすべて一字のみの破格となる。各拗字は出典を明示するため、または読者にわかりやすいような表現とするためなどの寛齋の工夫や拘りが看取できる。寛齋の拗体詩の最大の特徴は詩意の転換を拗格の利用によって実現させた拗格詩の創作にある。制限の多い律詩で失粘することによって、詩意の転換を一般的な「起承転合」より一層強める意図が推察できる。寛齋にとって、拗格詩は失律ではなく、律詩として合法的な存在である。また寛齋の拗格詩は先例を強く意識する作もあり、彼の独自の発展性が見られる作もある。全体的にみると、実作の面でも詩論の面でも古文辞時代の寛齋の韻律意識と性霊派時代のそれと一貫した部分が認められる。寛齋の詩風は転換したが、韻律の面においては、変化は起こらなかったと結論付けられよう。

第五章「柏木如亭の拗体詩——韻律重視と自己表出——」では、『詩律兆』の平仄律を基準に刊行された如亭の三詩集『木工集』（寛政五年〈一七九三〉序）、『如亭山人藁初集』（文化三年〈一八〇六〉序、同七年刊）、『如亭山人遺藁』（文政五年〈一八二二〉刊）における近体詩合計三二五首の平仄を精査し、当時の詩論に照らして如亭の拗体詩を検討した。全体的に見ると、如亭の拗体詩創作は韻律を最大限に守る範囲で自分の心情や生活を素直に表現したと言える。そもそも個人の感情や感覚を最優先する性霊派詩人にしても韻律を勝手に破るというわけではない。むしろ如亭自身や彼と同門の大窪詩仏の詩論から韻律を重要視する姿勢は性霊派詩人に共通しているところが看取できる。但し、性霊派の韻律重視はあくまで個人の真実な感情を尊重するうえでのものと窺える。

以上のように、本論文は『日本詩話叢書』を中心に江戸時代の平仄律及び失律に関する認識を把握した上で、格調詩と性霊詩における平仄の実態について四人の詩人の近体詩を通して考察を行った。寛齋詩と如亭詩と比べて、徂徠詩と南郭の『文集』初編の詩は、孤平と下三連が明らかに多い。とりわけ孤平の数が非常に多い。南郭の『文集』二編以降及び寛齋詩と如亭詩において孤平がほとんど見られない。また下三連について、徂徠詩と南郭の『文集』二編までは下三仄より下三平のほうが多い。南郭の『文集』三編と四編において下三平が下三仄より少なくなった。寛齋詩における下三平は下三仄より少ない。如亭詩においては、古風調を追求する仄韻の五絶における一箇所以外、下三平はない。第一章で論じたように、徂徠と南郭以前の詩学書においては、孤平と下三連はまだ重大な失律と見なされていない。また近体詩において下三平が下三仄より好まれないこともまだ一般的な認識になっていない。よって孤平と下三連に対する徂徠と南郭の認識は当時の一般的な認識に近いと考えられる。但し、春台との孤平に関する論争と実作から見ると、南郭はちょうど漢詩の認識の変化の渦中にあると推測できよう。

更に、近体詩の最低条件である粘対律の破格は徂徠詩にはやや多いが、他の三人の詩作には大差はない。南郭の『文集』の各編に次第に増加する傾向が見える。寛齋の詩風転換前後は、彼の詩論における韻律に対する認識も実作における韻律の様相もほぼ一貫している。従って、格調詩は韻律に過度に拘るとは言えない。韻律への影響は、詩派の文学主張より、漢詩の韻律に関する時代の認識によるほうが大きいと結論付けられよう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (黄 鶯)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 滝川 幸司
	副 査 大阪大学 教授 岡島 昭浩
	副 査 大阪大学准教授 浅井 美峰
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 江戸漢詩形式論—格調詩と性霊詩を中心に—

学位申請者 黄鶯

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 滝川幸司

副査 大阪大学教授 岡島昭浩

副査 大阪大学准教授 浅井美峰

【論文内容の要旨】

本論文は、江戸時代漢詩の音韻規則及び失律に対する認識を解明し、江戸中期の古文辞派と江戸中後期の性霊派の代表的詩人の詩作を取り上げて、平仄の実態と失律・拗体詩の特質を考察するものである。序章、第一章「江戸時代の平仄律及び失律に関する認識」、第二章「『徂徠集』の律詩における荻生徂徠の韻律意識」、第三章「『南郭先生文集』の律詩における服部南郭の韻律意識」、第四章「市河寛斎の拗体詩—拗格詩の利用—」、第五章「柏木如亭の拗体詩—韻律重視と自己表出—」、終章で構成される。

序章では、本章の目的を明示し、用語の定義を行う。第一章では、『日本詩話叢書』を中心に、江戸時代の近体詩の平仄律を明らかにし、失律や拗体について当時の各詩学書における詩論を取り上げ考察する。時代が下るにつれて平仄律が厳密に規定されるようになるとともに、拗体に対する寛容度がますます高くなったと指摘する。第二章では、『徂徠集』における五言律詩・七言律詩の平仄を精査し、徂徠の韻律意識を考察する。徂徠の格調説には典雅含蓄な修辭（詩語）や高華雄渾な詩風が含まれるが、近体詩の韻律は必ずしも含まれてはならず、後代の古文辞派の形式主義批判は徂徠詩の韻律の面には適用できないと結論づける。第三章では、『詩律兆』の平仄律に従い、『南郭先生文集』初編から四編までの律詩の平仄を調査し、各編の失律の様式を明らかにして南郭の韻律意識を考察する。初編から四編までの考察を通して、南郭の韻律に対する認識が深化していることを指摘する。江戸中期以降平仄律が厳密化し、十八世紀中には精密な平仄律がほぼ定着しており、この韻律意識の深化は南郭という一詩人の詠法に反映されるという。第四章では、『詩律兆』の平仄律に準じて寛斎の古文辞時代の詩集『寛斎摘草』及び詩風転換後の詩集『寛斎先生遺稿』における律詩を精査し、両詩集における拗体詩を寛斎の詩論と結びつけて論じる。実作の面でも詩論の面でも古文辞時代の寛斎の韻律意識と性霊派時代のそれとは一貫した部分が認められ、寛斎の詩風は転換したが、韻律の面において変化は起こらなかったと結論づける。第五章では、如亭の三詩集『木工集』『如亭山人藁初集』『如亭山人遺藁』における近体詩合計三二五首の平仄を精査し、当時の詩論に照らして如亭の拗体詩を検討する。如亭の拗体詩創作は韻律を最大限に守る範囲で自分の心情や生活を素直に表現しており、如亭自身や同門の大窪詩仏の詩論から、韻律を重要視する姿勢が性霊派詩人に共通していると指摘し、性霊派の韻律重視はあくまで個人の真実な感情を尊重する上でのものと論じる。終章では、以上の内容をまとめ、彼らの韻律意識は、詩派の文学的主張より、韻律に関する時代の認識によるほうが大きいと結論づける。

【論文審査の結果の要旨】

本論文で第一に評価できるのは、漢詩の平仄について詩学書で確認した上で、格調詩、性霊派の詩について、荻生徂徠、服部南郭、市川寛斎、柏木如亭の実作の平仄を網羅的に調査しその実態を論じた点にある。平仄調査は漢詩研究では極めて重要ではあるが、意外になされていない。それは多大な労力を必要とするという事情もあるが、本論文では根気よく四人の詩集所収の漢詩について平仄を確認している。まずこの作業自体が評価されるべきである。これまで成されなかった網羅的な調査の成果であるだけに、先行研究では指摘のない結論を導いている。本論文では、当時の平仄理解について江戸時代の平仄律を詩学書を用いて通史的に論じ、時代が進むにつれて平仄が厳密になっていくことを指摘し、その流れの中で、各詩人たちの平仄を論じていくが、その平仄を詩人たちがいかに守っていったのか、あるいは破ったのか、その破り方についての意識を当時の失律の認識を踏まえて論じている。結果的に彼らの失律は、当時の意識としては失律だと考えられていない、または唐詩など先例がありそれを踏まえている、あるいは典拠を重視するために平仄を外すことがあることなどから、技術的に平仄を誤っているわけではないという方向での議論となっている。これらの成果は、四人の詩人の検討ではあるけれども、代表的漢詩人を対象にしているだけに今後の研究に多大な影響を与えうると考える。今後はさらに調査対象を増やして検討し続けることも必要となつてこよう。

このように新たな視点を加えた成果ではあるが、惜しむらくは、これまでの古文辞学派格調詩・性霊派の研究と、今回の研究がどのように接続するのかという点について、明確な論点が提示されていない。その点は今後の大きな課題となろう。また平仄を確認する際にどのような資料を用いたのか論文中に明示されていないことも議論の前提としては不備である。さらにいえば、本論で論じられた平仄は、漢詩を作る側の問題として扱われているが、読む側の視点が欠落している。この点は論文中で曖昧に処理されているが、特に読者側が中国音で読んだのか訓読で読んだのかは、第一章で初学者の問題を論じるだけに必要な視点であったと思われる。このような疑問点は残るものの、網羅的な調査に基づく成果が揺らぐことはなく、これらの疑点は、今後の研究の発展により解消されて行くことが確信される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。